

(3) 土壌病害－2－美人薄命の諺は小麦にも通じる？ (条斑病・縞萎縮病)－

その1－「チホクコムギ」

私は水稲が大嫌いです。その理由は中学時代にさかのぼります。野球大好き少年の私は、中学に入るとすぐに野球部に入部しましたが、水田農家の長男である私の野球に使う時間は、父親によってことごとく奪い取られ、田植え、草取り、稲刈り、脱穀等々の手伝いへと向けられ、野球への思いを果たせなかったことに起因します。その後、農業試験場の研究員になった私は、水稲に関係する仕事には、手を染めないことを心に決めていました。

そんな私が、水田転換畑の春まき小麦に多発した病気（斑点病）が、水稲にも悪影響を及ぼした問題の解決に当たる命を受け、中央農試に赴任したのが昭和53年の秋でした。その頃、北海道の小麦栽培は、大きな転換期を迎えていました。それは、北見農試が育成した「北見42号、のちのチホクコムギ」が、全道各地で試作され、収量・品質ともに優れた小麦として評価されて、品種としてのデビューを待っていました。

そして、昭和56年に作りずらいいくつかの問題がありましたが、本道はじめて、めん用小麦の優良品種としてデビューしました。ところが、この年思ってもいなかった事態が発生しました。胆振支庁管内追分町の牧田俊夫さんの畑で、小規模に試作されていた「チホクコムギ」が、稔実を待たずに原因不明のままことごとく枯死してしまったのです。

北海道産小麦のエースとして、期待が高い「チホクコムギ」の先行きを、大きく左右する問題として認識され、直ちに原因究明が開始されました。私は、病気によるものかどうかを確認する作業を担当し、原因不明の枯死は、「じょうはんびょう条斑病」と言う病気が原因であることを突き止めました。同じ年に、網走支庁管内でも、「条斑病」が発生していることを北見農試も確認し、この病気は、北海道の広い範囲に発生している可能性があると考えられました。そのため、3か年にわたって全道の発生調査を実施したところ、主要な小麦栽培地帯の全てに発生していることが確認されました。

このようなことから、「チホクコムギ」を、「条斑病」の被害から守るため

の方法を見つける仕事を、中央・北見・十勝の各農試が、共同で開始したのが昭和58年でした。

その結果、この病気の発生・被害を軽減する方法として、①種子伝染するので、種子消毒によって発生地域の拡大を防止する、②病原菌は、土壌中の罹病麦稈*の中で、罹病麦稈が腐敗消失するまで生存するため、同じ畑で小麦の栽培を繰り返さない（連作しない）ことが、この病気の発生を少なくする、最大のポイントであることが判りました。

現在は、この考え方に沿った小麦栽培が進められたことによって、「条斑病」の発生は殆ど問題にならない状況が続いています。この病気の被害を軽減するための仕事に関係した私どもは、薄命の恐れがあった「チホクコムギ」が、一世を風靡し得た要因の一つに、私どもの仕事も加えても良いだろうと自画自賛しています。同時に、水稲関係の仕事には手を染めたくないという、私の思いもまっとうできたのです。「チホクコムギ」万歳！

その2 - 「ホクシン」

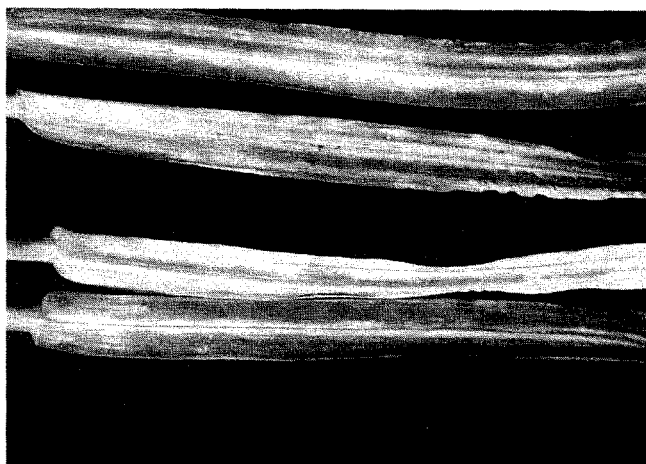
平成3年頃、伊達市の現地試験畑で、「北見66号、のちのホクシン」に特異的に発生する生育異常が観察されました。この生育異常は、後に「縮病」というウイルス病であることが判りました。良品質小麦という評価が高い「ホクシン」は、この病気に弱いという欠点があるため、この病気が北海道の広い範囲に分布することから考えますと、注意して栽培しないと、この品種も薄命の恐れのあることが指摘されています。

幸い、この病気に強い「北見72号、品種名未定」が北見農試によって育成されましたので、この病気の被害は大きくならず押さえ込まれるものと考えます。

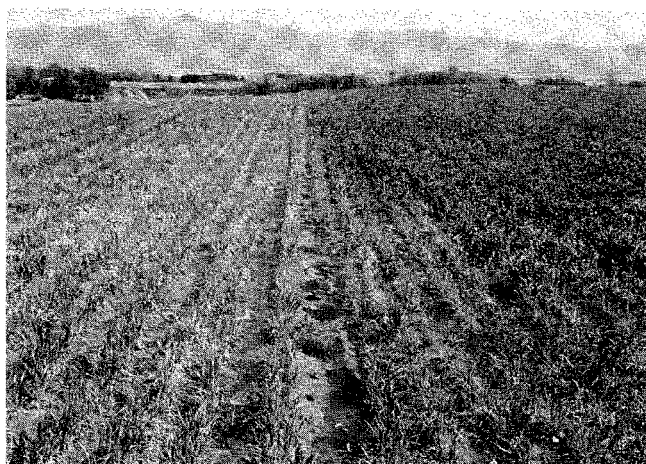
このように、育種の成果は、時として予期せぬ病害に弱いということが原因で、徒労に終わる可能性があり、やはり私ども病理屋との連携がとても重要なのだ、と勝手に再認識しているこの頃です。

罹病麦稈*：病気にかかった麦わら

<尾崎 政春>



条斑病に冒された小麦の葉



萎縮病に冒された小麦ほ場—左側の枯れかたが著しい